

系が古くから存在していたのではないかと、という研究が進みつつあります。また、分子人類学によって「人類がアフリカから出たあと、約 4 万年前にはすでに日本列島に到達していた集団がいた」ことや、「縄文文化が 1 万年以上継続した」という点が明らかになるなど、日本の古代史像は従来の通説とは異なる可能性を示唆しています。こうした「通説にとらわれない新しい歴史観」を学ぶとき、過去の事実を丹念に検証し、データや論理を突き合わせて矛盾を排除する手法が求められます。これは企業の経理やプロジェクト管理と同じく、現場主義と合理的思考が鍵になると思うのです。

社会人としてキャリアを積む中でも、「常識や権威を鵜呑みにせず、自分の目と頭で考える」ことが極めて重要でした。歴史研究のように遠い過去を探究する場合にも、正しい方法論と検証作業が不可欠である点は全く同じです。何事も突き詰めて考えれば、新しい価値や発見につながる可能性があるのです。

〇おわりに

以上、私のキャリアを大きく振り返りながら、大学生の皆さんが社会に出るうえで参考になりそうな点を中心にお話ししてきました。「管理会計」という専門性がベースになり、海外赴任や全社的なシステム刷新といった大きな仕事に携わったことで、粘り強さや論理的交渉力を身につけることができました。その後、大学教員として実務経験を若い人に還元し、さらに定年退職後には新たな研究や学びに打ち込んでいます。キャリアデザインを考える際、「自分が心から打ち込める専門分野をどう磨くか」「どのように周囲の信頼を得て、大規模なプロジェクトに参加するか」「どんなメンターや仲間を見つけるか」を意識するだけで、歩む道が大きく変わってきます。特に若い時期は、仕事の難しさや変化の早さに戸惑うこともあるでしょう。しかし、7～8 年という中長期的な視野で成長の機会を捉え、現場と理論の両方に根ざした知識を身につければ、大企業でも中小企業でも、国内でも海外でも、必ず自分の強みを活かすチャンスが見つかります。そして年齢を重ねてもなお、「好きなことを探究する姿勢」を持ち続ければ、新しい学びと出会いが絶えません。私のように古代史の研究に没頭し、未知の可能性を追求する道もあります。学生時代に培った専門性がキャリアを支え、それを土台に「その先の学び」に踏み出せるのです。どうか皆さんも、自分の専門を育てながら、広い世界に飛び込み、生涯にわたって学び続けてください。

◎奥山恵理 氏（平成 10 年卒・令和元年 O B S 修了／株式会社インセンブル
「大企業と中企業と小企業を経験して」

〇はじめに：環境が大きく異なる職場を渡り歩いた理由

私は小樽商科大学を 2 回卒業しています。1 度目は学部（社会情報学科）を 1998 年に卒業し、2 度目は社会人として働いたあと、2019 年にビジネススクール（OBS：アントレプレナーシップ専攻）を修了しました。

社会人としてはおもに以下の 3 つのステージを経てきました。

- ・ 中企業（地場企業）：社員 100 名程度の会社でパソコンスクール関連の業務からキャリアを始めた
- ・ 大企業：東証プライム上場の IT 企業へ転職し従業員 3 万人超のなかで Web 制作事業部に所属
- ・ 小企業（スタートアップ）：OBS 時代の縁で、社員数が一桁台の IT コンサル企業に転職。入社時 3 人だった従業員が今では 10 人を超え、成長過程を間近で体感している。

このように、大企業・中企業・小企業という全く異なる組織を渡り歩いたことで、「会社の規模が違くと、

組織のしくみも働き方もまるで違う」ということを痛感しました。今回は私の経験談をもとに、大学生の皆さんがこれからのキャリアを考える際に「組織規模の違い」にどう向き合うか、そのヒントをお伝えしたいと思います。

○中企業でのキャリアスタート：札幌のパソコンスクール運営

学部卒業後、私が就職したのは北海道札幌市を拠点とする中規模の企業でした。おもな事業はパソコンスクールの運営で、社員は 100 名ほど。直接利益を生む講師や営業職だけでなく、総務や人事などの間接部門があり、そこそこの組織感がありました。地元企業ということもあってアットホームな雰囲気があり、経営幹部との距離も近かったのが印象的です。私の主な役割はインストラクターとしてパソコン教室で教えることでしたが、それだけではなく、教室の立ち上げや運営、チラシのデザイン、さらには駅前でのビラ配りまで行っていました。社員ひとりが担う業務の幅がとても広く、私にとっては「ビジネス全体を把握しやすい」環境でした。同時に、組織内の人間関係も密なため、経営上の課題や会社の動向がある程度わかる規模感です。

○中企業のメリットとデメリット

●メリット

- ・ 部署間の垣根が低く、現場のアイデアが通りやすい。
- ・ 社員数が大企業ほど多くないため、「会社全体を動かす感覚」が持てる。
- ・ 経営幹部と近い距離で仕事ができるため、経営判断のプロセスを学びやすい。

●デメリット

- ・ 大企業ほど研修制度や福利厚生が充実しているわけではない。
- ・ 多くの業務を個人任せにする風土があり、マニュアルが整備されにくい。
- ・ 事業の成長や展開が限定されるため、先行きに不安を感じやすい面がある。

私の場合、パソコンスクール事業の市場が飽和気味になりつつあると感じ、これ以上キャリアを伸ばすのが難しいのではないかと思うようになりました。そこで、在職中に学んだ Web 制作のスキルを活かしながら別の環境へステップアップすることを模索するようになります。

○大企業への転職：東証プライム上場企業で Web 制作を担当

次に入社したのは、大手 IT 企業です。従業員が 3 万人を超え、東京をはじめ国内外に拠点を持つ上場企業でした。入社の手続きは「Web 制作のスキルをより大きなフィールドで試せる」という点です。中企業では自分ひとりで教室の運営から制作まで取り仕切っていましたが、ここでは大規模クライアントのサイトを構築・運営する案件が多数あり、スキルアップにうってつけの環境だと考えました。大企業では事業部が多数あり、それぞれが明確な役割分担をしています。私が所属した Web 制作事業部は、全社の売上規模から見ると中核ではなく「サブ的な事業」でしたが、それでも相当な人員を抱えるセクションでした。プロジェクトごとにチームが編成され、私の仕事はサイトのデザインやコーディング、運営管理などが中心。顧客企業との折衝は別の部署が担当し、私は制作に専念できます。

○大企業特有のメリットとデメリット

●メリット

- ・ 大規模案件に関わる機会があるため、予算や人材、設備が潤沢。専門スキルを磨きやすい。

- ・ 研修制度や福利厚生が整備されており、働くうえでの安心感がある。
- ・ 社内の人材が多様で、優秀な同僚や先輩から学ぶ機会が多い。

●デメリット

- ・ 仕事の範囲がはっきり区切られ、会社全体を変えられるほどの影響力は持ちにくい。
- ・ 意思決定に階層が多く、提案や変更がスピーディーに進まない場合がある。
- ・ 配属された部署が将来縮小・撤退の方向になった際、自分のキャリアも左右されるリスクがある。

在職中に私は「やりがい」と「不安」の両方を感じていました。一流企業の看板がある分、優秀な人が集まっており、刺激的な毎日ではあるものの、自分の立ち位置や将来像がやや曖昧に思えたのです。配属された Web 事業部が社内では主力とは言えないポジションだったこともあり、「自分がこの会社を根本から動かすことは難しい。いずれは別の方法でキャリアの幅を広げたい」という気持ちが強まっていきました。

○小企業（スタートアップ）での挑戦：OBS の縁が導く転職

そこで私が選んだのが、再び小樽商科大学ビジネススクール（OBS）で学ぶ道でした。大企業時代に感じていた「専門職としての成長はできても、組織全体を変えるリーダーシップや経営感覚は得にくい」という悩みを解消するためです。OBS ではアントレプレナーシップや経営組織論、マーケティング、ファイナンスなど幅広い学びを得つつ、他業種の社会人学生との交流も深めました。こうして、経営の全体像を改めて勉強する中で「大企業以外の選択肢に飛び込んでみよう」と考えるに至ったのです。OBS でのネットワークがきっかけで、札幌にある小さな IT コンサル会社への転職話が舞い込みました。当時の社員数は 3 名。社長とプログラマー 1 名、そして総務的な仕事を兼ねるスタッフ 1 名という超少数精鋭で、「大企業の歯車」のように働いていた私にとっては真逆の環境です。ですが「ゼロから仕組みを作る面白さ」を味わえるのではと考え、思い切って転職しました。

○小企業でのメリットとデメリット

●メリット

- ・ 経営者との距離がゼロに近く、会社の方向性や戦略に直接コミットできる。
- ・ 意思決定が圧倒的に速く、提案がすぐ実行に移される。
- ・ 自分の仕事が業績に直結し、「会社を動かしている」手応えが強い。

●デメリット

- ・ 社会保険や経理など制度的な部分が整備途上で、安心感には乏しい。
- ・ 資金繰りや売上確保に常にプレッシャーがある。
- ・ 人材が少ないので、自分の責任範囲が非常に広くなり、多忙かつ失敗が許されにくい。

私はここで「会社が大きくなるフェーズ」をリアルタイムで体験しています。入社当初 3 名だった社員が、今は 10 名超になりました。その過程で、フラットだった組織が徐々に階層化し、リーダーを置く必要性が出てきたり、部門間の役割を明確にする必要に迫られたりするのは、OBS で「経営組織が大きくなると階層が生まれ、組織文化が変容する」という理論を学んだのですが、それを現場で目の当たりにして「本当にこういうことが起こるんだ」と確信しました。

○組織規模を超えて共通するもの：人間が作り上げる組織

振り返ると、私は中企業、大企業、小企業のいずれでも「組織を動かすのは最終的に“人”である」と痛感

しています。どんなにシステムやマニュアルが整っていても、そこで働く人々が主体的に動いてこそ成果が出るし、逆に「人間関係がぎくしゃくする」と大きな企業でも機能不全に陥ることがあります。特に小企業やベンチャーでのトラブルは、組織全体の存続を揺るがす問題になりかねません。また規模がどうであれ、「自分の専門性」と「組織の方向性」が合致しているかが重要です。中企業では「パソコンスキル+Web制作の知識」を活かし、大企業では「Web部門のスペシャリスト」として働き、今の小企業では「IT領域の知識+経営サポート」まで担っています。どのステージでも、自分なら何ができるのかを問い続け、そのときの組織のニーズに合わせて役割を変化させてきました。

○大学生へのメッセージ：自分に合う“規模感”を探す

ここで、大学生の皆さんにいくつか具体的なアドバイスをお伝えします。

1) 規模の違いを知る

就職活動では大企業が人気かもしれませんが、中小企業やスタートアップでも魅力的な仕事は山ほどあります。大企業だから安定している、中小企業だから危険という単純な図式にとらわれるのではなく、それぞれの長所と短所を理解しましょう。自分が「今の段階で何を学び、どう成長したいのか」を踏まえて選択すると良いと思います。

大企業：充実した研修制度、幅広い専門領域、企業名のブランド力など。

中企業：経営者や幹部との距離の近さ、個人の意見が反映されやすい規模感。

小企業・ベンチャー：スピーディーな意思決定、役割の幅広さ、創造的な環境。

2) まずは得意分野を持つ

大企業でも中小企業でも、どこに行っても「自分の強み」があれば重宝されます。私の場合はパソコンスキルやWeb制作が軸になっていました。どの規模の会社に行っても武器となる専門性を磨いておくと、自信が持てるし、キャリアチェンジもしやすいです。

3) 転職や学び直しはキャリアの一部

一度就職したら終わりではなく、私のように働きながら大学院に通って学び直すことも可能です。大企業からベンチャーへの転職も、逆もありえます。現在の日本は「新卒から定年まで1社に勤める」時代ではなくなっており、個人が自分の意志でキャリアを設計できる幅が広がっています。

4) 組織を観察し、人を大切にする

組織規模によってルールや文化が異なるのは当然ですが、最終的には「人間関係」が重要です。経営者や上司、同僚との相性を見極め、自分が居心地良く働ける環境かどうかを意識すると、長期的に幸福度が高いキャリアを築けます。会社説明会や面接でも、「社内の雰囲気」をよく観察してみてください。

5) OBSなどの大学院活用も一手

私は大企業で働きながら、「もっと経営全般を学びたい」と思ってOBS（小樽商科大学ビジネススクール）に進学しました。そこでの学びと人脈が転職のきっかけとなり、結果的にスモールビジネスの世界に飛び込む決断ができました。学部卒から一度就職し、数年してからMBAや修士課程に進むケースは増えてきています。キャリアのなかで再び学び直すプランも、選択肢の一つに入れてみてください。

○おわりに：自分の居場所は複数ある

私の歩みは、「中企業 → 大企業 → 小企業」という形でした。もし最初は大企業に行っていたら、次は中小企業に行ったかもしれないし、あるいは起業やフリーランスの道を選んでいた可能性もあります。大切な

は「自分の働き方や価値観が、その会社の規模や文化にフィットするか」を常に問い続けることだと思います。あなたが「どう働きたいか」「今どんな力をつけたいか」によって最適解は変わるでしょう。そして自分が選んだ環境で不十分だと思えば、転職や学び直しによって軌道修正が可能です。私自身がその証拠と言えます。

大学生の皆さんにとって、就職活動はキャリアの一步目にすぎません。大企業であれ中小企業であれ、自分を成長させるチャンスはどこにでも潜んでいます。組織の規模に振り回されるのではなく、ぜひ「自分に合う居場所はどの規模なのか」「この会社を通じてどんな成長を得られそうか」を見極めてください。キャリアを積む中で組織を変える選択も、学び直しや起業といった選択も十分にありうる時代です。最終的には、人と人との関係が組織を作り上げます。規模が違っても、人を大切にしながら自分の専門性を活かせる場所を選び、そこで成果を出すことで、新たな道も開けていくでしょう。私の経験が少しでも「大学生が自分に合うキャリアを描く」お手伝いになれば幸いです。

◎佐々木 剛 氏（昭和 63 年卒／株式会社北海道銀行 取締役専務執行役員
「銀行員としての仕事」

○はじめに：AIESEC（アイセック）が育んだ国際ビジネスへの夢

私は 1987 年に小樽商科大学を卒業し、北海道銀行（以下、道銀）に入行しました。在学中は国際経済学のゼミに所属しながら、サークルは AIESEC（アイセック）という国際 NPO で活動していました。AIESEC は、海外研修生の受け入れや留学生との交流、スタディーツアーなどを通じ、学生のうちから「国際ビジネス」「異文化コミュニケーション」を肌で感じる場を提供してくれる組織です。私自身、フィリピンやインドへのスタディーツアーに参加し、現地学生と交流を深めました。日本経済がバブル期と呼ばれる好況期に差し掛かり、大手銀行や証券会社が海外拠点を増やすニュースを耳にし、「自分も将来は海外で働きたい」という思いを強く抱くようになったのです。AIESEC の活動を通じ、道銀の人事部とも接点ができていたことが、最終的に銀行員としてのキャリアに繋がりました。

当時、日本の地方銀行で海外ビジネスを本格化する動きは大手行ほど活発ではなかったのですが、道銀もニューヨークやロンドンへの進出を始めようとしていたタイミングでした。そこで私は採用面接のときに「国際拠点で働かせてほしい」とストレートに申し出たところ、運良く「いいだろう、約束する」と返事をいただきました。これが道銀との縁、そして銀行員人生 37 年のスタートです。

○北海道銀行の歴史と地域金融機関の役割

入行直後、私は北海道銀行という存在を改めて学ぶ機会を得ました。道銀は 1951 年、「道民による道民のための銀行」をスローガンとして設立されました。当時、北海道には北海道拓殖銀行（拓銀）がありましたが、中小企業の需要を満たせるだけの融資体制を整えるには不十分だったのです。

やがてバブル期を経た 1990 年代以降、道銀も不良債権処理に追われます。多額の損失に苦しんだ末、同じく苦戦していた北陸銀行との経営統合に踏み切り、2004 年にほくほくフィナンシャルグループが誕生しました。現在のほくほく FG は全国の地方銀行グループの中で預金・貸出金ともにトップクラスの規模を誇り、地域金融機関として道内経済を支える大きな役割を担っています。

一方、1997 年には北海道拓殖銀行が破綻し、金融システム不安が全国に波及するなど、地方銀行にとっては